

口耳の口

大形徹

はじめに

白川静は一九八四年初版の『字統』口において、『説文解字』の「口」の字形をあげた上で、

象形 口の形。「説文」二上に「人の言食する所以なり」という。ト文・金文にみえる字形のうち、口耳の口とみるべきものはほとんどなく、概ね祝禱の器の形である「𠂔」（さい）の形に作る。従来（1）の説文学において、口耳の口に従うと解するために、字形の解釈を誤るものは極めて多く、古・召・名・各・吾・吉・舍・告・害・史・兄などは、みな祝禱の器を含む形。また曰に従うとされる者・曹・魯なども、みな祝禱を取めた器の形に従う。口耳の口に従う字は、概ね後起の形声字である。もっとも口という字は「書、般庚」、また「詩、小雅、正月」「好言口よりす」、「十月之交」「讒口囂々たり」のように、早くから用いられているが、ト文・金文にその明確な用義例がなく、祝禱の器の形である「𠂔」との異同を、確かめることはできない。（1）

と述べる。文字の具体例は『説文解字』の「口（くち）」の篆書口があげられるのみで、甲骨・金文の例はない。（2）一九九六年初版の『字通』口においても、『説文解字』の「𠂔」の字形のみをあげた上で、

象形 口の形。「説文」二上に「人の言食する所以なり。象形」という。ただト文・金文にみえる口を含む字形のうち、口耳（3）の口と解すべきものはほとんどなく、おおむね祝禱・盟誓を取る器の形である「𠂔」（さい）に従う。すなわち祝告に関する字とみてよい。文字は祝告の最もさかんに行われた時期に成立し、その儀礼の必要によって成立したものである。

古訓 省略

部首 「説文」に名・吾・君・命・召・唯・和・哉・台・后・咸・呈・右・周・各・哀・尙・局など百八十字、重文二十一、また「新附」十字を属し、「玉篇」には後出の字を合わせて五百十三字を属する。「説文」のうち、右にあげた諸字はみな祝禱の儀礼に関

する字。口耳の口の意をもつ字は、おおむね卜文・金文より後に作られた字である。もとより「書、盤庚上」「乃が口を度(と)ぢよ」、「詩、小雅、正月」「好言、口よりす」、「詩、小雅、十月之交」「讒口囂囂たり」のような例もあるが、卜文・金文の字形中に要素として含まれている口形のもものは、祝詞を収める器の形である「(さい)」と解すべきである。

【声系】「説文」に口声として訶・扣・鉞の三字を収めるが、おおむね後出の字である。⁴⁾

と説明する。

ここでは『説文解字』を引用して「人の言食する所以なり。象形」と述べている。そのあと、卜文・金文では、ほとんどが「口耳の口」ではなく、「祝禱・盟誓を収める器の形である「(さい)」に従う」という。この「(さい)」は白川文字学の根幹をなすものである。⁵⁾

その結果、ここは「口耳の口」に関する項目であるにもかかわらず、それについては白川自身による説明がまったくなされていないのである。

拙稿では、このいわば置き去りにされた「口耳の口」について若干の考察を行いたい。白川は「口耳の口と解すべきものはほとんどなく」と述べているが、そのほとんどない事例が何なのかを考察したい。またなぜ、ほとんどないのかについても考察したい。さきに見た『字通』部首で、白川は「もとより「書、盤庚上」「乃が口を度(と)ぢよ」、「詩、小雅、正月」「好言、口よりす」、「詩、小雅、十月之交」「讒口囂囂たり」

のような例もあるが」と、「口耳の口」の例の存在を認めている。

『書経』には、「口耳の口」とみなしうる例が五例みえる。盤庚上に「其の發するに逸口(いっこう)有り」、同「乃(なんじ)が口を度(と)じよ、無逸に「否(しか)らずんば則ち厥の口詛祝(そしゅう)す」、周官に「利口を以て厥(そ)の官を亂る無かれ」、畢命に「利口惟れ賢」とある。

『詩経』には四例みえる。國風、豳風、鴟鴞に「予が口、卒(みな)な瘖(や)む」とみえ、目加田誠は「私の口は疲れはてたが」と訳している。小雅、節南山之什、正月には「好言口よりし、莠言口よりす」とみえる。小林一郎は『好言口よりす』―或る人は頼もしいことも言ふけれども、『莠言口よりす』―また或る人は詰らないことばかり言つて、周囲の人々に累ひを及ぼして居る」と訳している。目加田は二句をあわせて、「ほめるのもそしるのも口から出まかせの今の世に」と訳し、そこに「口」という文字を使っている。十月之交は「讒口囂囂(ざんこうごうごう)たり」、目加田は「そしりはゴウゴウ降りかかる」と訳している。巧言では「蛇蛇(いい)たる碩言(せきげん)、口より出づ」とあり、目加田は「世を欺く大言は口から出まかせ」と述べている。大雅、生民之什、生民の「以て口食に就く」は、目加田は、「乳ばなれし時より」と訳している。

これらを見ると、「口」が「口耳の口」として使用されることは、とくに珍しいわけではない。ただし、『書経』や『詩経』では「言」の用例の方が多く、「食」とみなしうるものは「口食」のみである。

さて甲骨文の用例を集めた『甲骨文合集』と『甲骨文合集補編』

に「口」は八八箇所みえる。これらのうち人名と解しうるものも多いため、明確に「口耳の口」がいくつとはいえない。また「口耳の口」といっても、食べ物を食べる口以外に、言葉を発する口として使用され、「口」だけで、口舌・口禍・舌禍の意味も含むようになっていく。人体と結びつくものが多くある。側身形の「人」の上に「口」がつく。横向きに口がついたものは「欠」「吹」、さらに涎や液体状のものを出しているものは「次」である。身体の向きとは反対に口が向いているものは「无」、口の上に舌のつくものが「舌」、下向きの口から舌を出しているものは「歛(=飲)」である。

なお「兄」や「祝」も側身形の「人」に上向きの「口」にみえる形があわさったものである。側身形の「人」に「目」がつくと「見」、「耳」がつくと「聞」である。そのため、口耳の「口」がついて「兄」というのはごく自然なようにみえる。しかし、白川静は、側身形の「人」に「火」がついたものが「光」という例をあげ、「口」は側身形の「人」に「口(さい)」がついたものだとする。

「口耳の口」の形を明らかにすることによって相対的に「口(さい)」に対する理解も深まるのではないか。拙稿の目的はそこにある。

「口耳の口」は「象形」とされている。そこでまず、「一、青銅器にみえる人面の口の形」に関して考察する。そして口が構成要素になっていることが確定である「齒」や「齧」などの甲骨文の字について考察する。つぎに「二、口の甲骨文・金文とその解釈」をみる。そしてそれらに対する解釈を紹介する。さらに「三、人体の一部としての口」である「欠(あくび)」等々、人の身体とともに使われている例を考

察する。「四、部首として口偏に入れられるもの」、例えば「呼」などが、卜文・金文では、どのような文字であったのかについても検討したい。

一、青銅器にみえる人面の口の形

ここでは青銅器の人面にあらわれる「口」の形を考察する。金文の文字も青銅器上のものであり、材質的にも近縁である。

人面獸紋弓形器²⁶⁾



商伝河南安陽市出土。長三四、五センチメートル。

「弓身は扁平であり、…両側は均しく獸面紋と人面獸紋が裝飾されている」とされる²⁷⁾。この人面の「口」は閉じられているようにみえる。文字の造形として、閉じた「口」はないように思われる。「口」は開いていないと、その用をなさないからだろう。

人面大鉞 その一²⁸⁾

商山東青州市蘇埠屯大墓出土。高三〇、四センチメートル、刃の寬さ三五センチメートル。

鉞の本体には裝飾として人面紋が透かし掘りされている²⁹⁾。この人面の「目」は甲骨文的「目(𠄎)」³⁰⁾に酷似している。黒目にあたる部分の下にはみ出しているところも同様である。この文字には瞳はない



が、『甲骨文合集』六一九四、六九四六正、『殷周金文集成』八七六二（いずれも殷）には瞳がある。「耳」は同一とはいえないものの『字通』に紹介される甲骨（) 金文（) の形と似ている。「口」は開いており、口角は少し上がっている。歯は上に七本、下に七本あらわされ、上下の歯は、くっついている。

人面大鉞 その二⁽³¹⁾

商 山東青州市蘇埠屯大墓出土。高三二、七センチメートル、刃の寬さ三四、五センチメートル。

眉、目、鼻、耳、口は皆な突起しており、…嘴の角の両側には各おの一つの亜字形の枠の中にはいった族名文字「醜」がある。銘文の右は正書で、左は鏡文字である。⁽³²⁾



目の瞳の部分は透かし彫りであるが、白目の部分はない。そのため、たんに丸い形になっている。

口は開いており、隙間のあいた歯が並んでいる。歯は数え方にもよるが、上に六本、下に一〇本あり、両端の歯は上下がつかっている。口角はあがっている。口の中に歯がある文字は後で考察する「齒」と「齟」である。しかし、「口」の象形文字では歯をあらわすことはない。鼻の部分の上の文様が「舌」の甲骨文（) に似ている。この文様は最下部は鼻の小鼻のようにみえ、つぎに左右対称に枝分かかれし

た部分が一旦、斜め上に向かったあと湾曲して下に向いている。上部は二股に分かれ、やはり少し湾曲している。「舌」については、後で考察する。

神面大鉞 その二⁽³⁴⁾

商 山東青州市蘇埠屯大墓出土。

高さ三〇、七センチメートル、刃の寬さ三五、八センチメートル。



鉞の本体には、丸い目に剥き出しの歯をした神面が透かしぼりされている。眉、目、鼻は皆な突起し、口はすこし下に凹んでいる。⁽³⁵⁾ 「目」は甲骨文に近い。鼻の上部の文様は先にみたものと似ており、「舌」の甲骨文に近い。歯は数え方にもよるが、上に一〇、下に一六あり、あわせて二六である。親知らずを除く成人の歯の数が二八なので、それに近い。口角が巻き込むような形にあがっている。

青銅器の図像資料⁽³⁶⁾の口の部分は甲骨文・金文の象形文字との近縁性を感じとることができる。金文に関しては青銅という材料も共通する。あとで考察する「齒」や「齟」の文字は、この人面の口の形に似ている。中国の文字は線によってあらわされる。自然界に存在するものを線によって表現していく過程に、このような図像があり、象形文字があるのだらう。図像資料の「口」と象形文字の「口」が近いのは

当然なのだろう。

二、「口」の甲骨文・金文とその解釈

ここで実際に「口」の文字の例をいくつかあげてみたい。まず「口耳の口」と解しうる甲骨文的例である。

①『甲骨文集』一一四六〇正甲の「口」（該当部分のみ）



「貞𠄎口御（禦）
（貞う口を𠄎（や）
むを七甲より御
（禦）（ふせ）が

んか⁽³⁸⁾」とみえる。なお徐仲舒は「貞𠄎口（貞う口を𠄎（や）むか⁽³⁹⁾」乙一四六三という例をあげている。「齒」では「貞𠄎齒御于父乙（貞う齒を𠄎（や）むを父乙より御（禦）（ふせ）がんか⁽⁴⁰⁾」前一、二五、一の例をあげている。父乙は、祖先のことだと思われ、その靈魂が祟るということになる。

ここは「口」と「齒」が異なるが同様の意味であろう。口を病むというのは、齒疾なのかもしれない。

「口」の文字は扁平で横画は撓（たわ）んでいる。口角の部分は少しあがっている。なお白川静はこれらの例をあげていない。

「口」に関しては後にあらためて考察する。じつは貞人の名などの例が圧倒的に多い。以下は「口耳の口」の意味での用例ではない。

② 口尊⁽⁴¹⁾ 殷

「口」一文字だけである。「口尊」と呼ばれている。「口」の文字は



③ 宁（ちよ）未口尊⁽⁴²⁾ 殷

扁平ではなく、横画は少したわみ、口角がほんの少しあがっている。しかし、「𠄎（さい）」のように両端が突出して上にあがってはいない。



④ 父戊口⁽⁴³⁾ 西周早期



三文字の名前である。「宁（ちよ）未口」と積されている。「口」の文字は少し扁平で、口角があがっている。横画はかなりたわんでいる。

「口」の文字は扁平ではなく、口角はあがらない。横画もたわまない。下の部分がU字型になっている。

例が少なく、簡単に結論は出せないが、甲骨文的「口」は扁平で横画は撓（たわ）んでいる。金文の「口」はそれほど扁平ではなく、下部はU字型にみえるものが多い。口角の部分は少しだけあがっているものと、まったくあがっていないものがある。

『甲骨文集』と彭邦炯『甲骨文集補編⁽⁴⁴⁾』（語文出版社、一九九九年）に「口」の用例は八八箇所みえる。このうち、もっとも多いのは「口鼎（貞）」の形である。六一箇所みえる。この場合、「口」は貞人の人名であると考えられる。たとえば、

合集（編號）二七七〇五（序号）一（釈文）壬戌卜、口鼎（貞）、今日不□（不明文字）。二（壬戌卜す、口鼎（貞）う、今日□（不明文字）せずや。二）（分類）何組

とみえるものがそうである。

それ以外のものとしては、

合集（編號）二七八八九（序号）二 夷（惠）小臣口。（分類）無名組

とみえる。これは「小臣口」とあり、「口」はやはり人名である。

合集（編號）二二二五八（序号）十 辛丑卜、亡口（辛丑卜す、口亡きか）。（分類）婦女類

この場合の「口」は、徐仲舒のいう災禍の意味だとわかりやすい。

戊寅作父丁方鼎〇二五九四は、「王口（王曰く）……」とある。戊寅乍父丁方鼎の全文の釈文は、「戊寅。王曰。□馬。□。易貝。用乍父丁彝。亞受」である。⁴⁵ここでは、文字としては「口」であるが、釈文はそれを「曰」としている。意味は「いう」ということになる。『甲骨文編』⁴⁶巻二・七は「口」を十二例あげる。そのうち、甲九四〇に「廩辛時貞人名」とし、明蔵七六〇に「小臣口」とあげている。

徐中舒主編『甲骨文字典』⁴⁷は、

口 一期 合一二三

〔解字〕《説文》：「口、人所以言食、象形（口、人の言食する所以、象形）」

甲骨文正象人之口形（甲骨文、正に人の口形を象る）。

〔釋義〕

一、人所以言食之器官（人の言食する所以の器官）。

貞口（貞う口を）（や）むか 乙二四六三

二、人名。

丁巳卜夷小臣口己句于中室（丁巳

ト夷、小臣口、中室に己句す）甲六二四

三、疑為禍之義（疑うらくは禍を為すの義）。

甲戌卜亡口（甲戌卜す、口（わざわざ）亡きか）乙

八八八九

（あと二例は省略）。

である。

「口」の病氣、人名、災禍の意味が記されている。

水上静夫『甲骨金文辞典』⁴⁸「口」では、「動物類の顔面の下部にあり、飲食物を取り入れ、呼吸をし、音を出すくちの形に象る」とある。水上の辞書は白川静のものよりも後の発行である。しかし、白川静のいう口（さい）に関する説は全く反映していない。「飲食・呼吸・音声」と口を結びつけている。

落合淳思『甲骨文字字典』⁽⁴⁹⁾では以下のような部首説明がある。

口部 (𠂔・言・齒)

【部】 口 (𠂔) は開けた口の象形。甲骨文字の部首としては、口や発声に関する文字に使われる。そのほか口に関係する形として、頤 (あご) の象形でその初文とされる𠂔 (𠂔) があり、甲骨文字には単独では使われていないが、会意文字や形声文字に見える。【副】 𠂔 (𠂔) は口と同形だが器物の象形である。特定の器種ではなく、器物の一般像として用いられている。文字が作られた当初は別の形だったかもしれないが、甲骨文字の段階ではほぼ同化しており、字形から両者を識別することは困難である。なお、𠂔 (𠂔) の形は、器物や口のほかに、祭祀を象徴する意符や建物の土台の形、抽象的な物体などとして使用されることもあり、その場合も𠂔に配列した。／言 (𠂔) は口を意符、辛 (𠂔) を声符とする形声文字。／齒 [齒] (𠂔) は口中に歯があることを表している。

ここで𠂔 (さい) とされている文字は、梁顧野王撰『玉篇』卷五、口部第五十六では「聲類、古文口字」とされる。『聲類』は『隋書』経籍志に十卷、魏、左校令、李登撰とされている。『甲骨文字辞典』が「𠂔」を「さい」と読むのは白川説に従ったからだという。⁽⁵¹⁾

以下、【口】〈𠂔〉について、

【𠂔】 象形。前記参照。「𠂔」は器物を二重にした形 (欠損片の一例のみ) であり、「𠂔 (さい)」としての用法であろう。

① くち。口腔。𠂔作𠂔 𠂔千𠂔十 (貞、疾口、禦于妣甲。合一四六〇) ② 地名またはその長。第三期には何組の貞人名：例文略。③ 祭祀名。この場合は、「𠂔」の意味かもしれない。𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔 (癸卯卜古貞、亡羌口。合一八九九二)

とみえる。

ここで祭祀名とされるものは「亡口」であり、さきにもた徐仲舒が災禍としているもの「亡口」と同じである。

李孝定は、

説文『口人所以言食也。象形』。凡そ口の属、契文、𠂔に作る。正に口の形に象る。甲編一二二五、𠂔に作る、尤 (はなは) だ尙 (に) る。類纂類編文編文字編均しく録を失う。⁽⁵²⁾

と述べる。

𠂔の形の方が実際の口に、もっともよく似ているが、『類纂』『類編』『文編』『文字編』はいずれも収録していない、という。

饒宗頤は、

卜辞「亡作口」(見庫方七〇三)「亡至口」(屯乙八七〇四、十八、八二〇、…) 俱に口舌の禍を興す。大禹謨に云う、「唯「惟」

れ口に好く戒を興すを出だす」と。「大戴礼」武王踐祚、机の銘に曰く、「口、咥（はじ）を生ず、口、口を狀（そこな）う」と。『説苑』敬慎篇に言う、「孔子、周に之（ゆ）き、太廟の右陛の前に」金人「有るを観る」。三たび其の口を緘（と）じて、「其の背に銘して曰く、『古の言を慎しむの人なり、之れを戒しめんや、之れを戒しめんや、多言する無かれ、多言は多く敗る…』」、口を以て禍を生ずるを戒しむ、と。故に易の頤卦、慎言を以てす…と。俱に口舌の禍を興す。

としている。

ここは食べる口ではなく、言う口のこと、それによって口舌の禍がおこることを述べている。

口舌自体については、白川静は『字通』で以下の例をあげている。

【口舌】こうぜつ 口先。弁舌。「史記、劉敬伝」上（しやう）怒り、劉敬を罵（ののし）りて曰く、齊虜（齊の男）、口舌を以て官を得、今廼（すなは）ち妄言して、吾が軍を沮（はげ）むと。敬を廣武に械繫す。遂に往く。平城に至り、匈奴、果して奇兵を出して、高帝を白登に圍む⁽⁵³⁾。

という。

饒宗頤は、ここにいう口舌の意味を、すでに「口」だけであらわしていた例があった、と考えている。

口に関する似た例は、『論語』にすでにみえている。「口給」は、

【口給】こうきゆう（きふ） 口達者。「論語、公治長」人を禦（ふせ）ぐに口給を以てせば、屢々（しばしば）人に憎まる⁽⁵⁴⁾。

「利口」は、

口達者。「論語、陽貨」子曰く、紫の朱を奪ふことを惡（にく）む。鄭聲の雅樂を亂すことを惡む。利口の邦家を覆（くつが）へす者（こと）を惡む⁽⁵⁵⁾。

と説明されている。このような熟語は、その構成要素になっている「口」がすでに「口舌」の意味もっているからこそ成り立つといえる。

さて、饒宗頤は、さらに以下のことも述べている。

按ずるに、甲骨文の口の字は口の形を象（かたど）る。卜辭に「疾口（口を疾む）」の占有り、此れ乃ち「口」を用いるの本義。又た廩辛・庚丁の時の貞人の名、「口」と。卜辭、口字の別の一種の用法、乙八八九二合集二二四〇五の「多口」、「又乍余、口十」の如きに至りては、「人口」、「丁口」の「口」に相当するが似（こ）し⁽⁵⁶⁾。

ここでは「口」の字形は象形だとし、「口を疾む」の「口」が、そ

の本義だとしながら、真人の名の「口」という固有名詞や、人口の「口」のような使用例があると述べている。

それでは、食べる「口」はどのようなのだろう。後世の熟語の中には、いくつつか、それに関する用例がみえる。さきにみた『詩経』大雅、生民之什、生民の「以て口食に就く」がそうであった。

他に白川は以下の例をあげている。

【口爽】こうそう(さう) 味の感覚を失う。「老子、十二」五色は人の目を盲ならしめ、五音は人の耳を聾(ろう)ならしめ、五味は人の口を爽(たが)はしむ。⁵⁹⁾

『老子』である。ここは「五味」とあり、味のことである。その前に「五色と目」、「五音と耳」がでてくるため、食べる口であることがわかる。

【糊口】こうこう 貧しくくらす。「左伝、昭七年」其の(正考父の)鼎銘に曰く、是(ここ)に饘(せん)し是に饘(あく)し、以て余が口を糊すと。其の共(うやうや)しきことは(かく)の如し。

これは『春秋左氏傳』であるが、鼎の銘文の話となっている。「饘(せん)」は「粥(かゆ)」のことで、「饘」もまた粥である。そのため、この口は食べる口である。この場合も「口」が本来、食べる口、味わう口の意味をもっているために、それらを基礎とする熟語がなりた

つと考えることができる。

以上、「口」に関しては、甲骨文に「言う口」「食べる口」の用例があり、後世の熟語の用例は、それらをもとにして生み出されたと考えることができる。これらはいずれも「人体の口」である。

三、人体の一部としての口

齒

まず『字通』から一部分、紹介する。

【齒】(齒)

【字音】シ 【字訓】は・きば・よわい・たぐい

説文  

甲骨   

金文  

【形声】声符は止(し)。卜文には声符を加えず、象形。「説文」二下に「口の斷骨(ぎんこつ)なり。口齒の形に象る」という。卜辭に齒の疾を下すものがあり、また齒に虫を加えた齲(むしば)を示す字がある。齒によって獸畜の年を知りうるので齡(齡)

といい、老いて徳の成就することを齒徳という⁶⁰⁾。

齒に関して白川静のあげる例以外のものを紹介する。『甲骨文合集』だけで齒の用例は七六ある。そのうちの二部である。

① 二五四六 四九二頁。

齒一文字として積されている。上には齒がなく、下に二本ある。



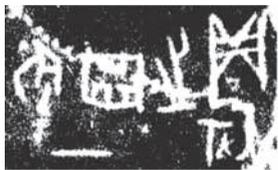
② 六四八二三

九六七頁。(齒の部分の前後のみ切り取り)

貞祝以之疒齒(齒)鼎頤⁶¹⁾。

齒は、上に一本、下に二本のようにみえる。

『甲骨文合集』の齒の用例七六のうち、二八例が「疒」と「齒」が組み合わせられている。齒疾の例であろう。



他に乙四六〇〇に「貞疒齒不佳尗(貞う齒を疒(や)むは佳れ父乙の尗(たたり)ならざるか)」、乙四六二四に「貞疒齒不佳父乙尗(貞う齒を疒(や)む有るは佳れ父乙の蚩(たたり)ならざるか)」とみえる。

卜文には、声符の部分がない。そのため口の中に齒がある象形文字

である。口角の部分は少し上がっているものが多く、それは「口」の象形文字と同じである。形は正方形に近いものが多い。横画は少しわんだ形になっている。齒は、上に一本だけのもの、上下に二本ずつのもの、牙のように尖っているもの、上に二本だけのもの、上にはなく下に二本のものなど、さまざまである⁶²⁾。いずれも齒間に隙間のある、すきつ齒である。いずれにしても、この形が「口」の象形であることは間違いない。ここから齒を抜き去ったものが「口耳の口」となる。金文は声符の「止(し)」がつき、その影響か、下の口の部分の上部の横画がなくなり、その上に「止」が載っている。そのため、「止」の横画が「口」の上部の横画を代用する形になっている。篆書以後の隸書・楷書の字形にいたるまで、すべてそうである。なお説文にあげられる「𠂔」の字形は、声符の「止」がない。甲骨文の字形に似ているが、口中の齒のあらわし方は、楷書の八が縦に三つ並んでいる形であり、実際に齒が生えている状態とはいいたい。

𠂔

【稱】【𠂔】

【字音】ク・ウ 【字訓】むしば

説文

甲骨

「形声」声符は禹(う)。禹に踴(く)の声がある。「説文」二下
に「齒の蠱(むしくひ)なり」とあり、むしばをいう。ト文に齒
(齒)に虫を加えた字があり、おそらくむしばの字であろう。⁽⁶⁵⁾

「虫(禹)」が口の中に入りこんでいる形。もとなる口の形は、さ
きにみた歯と同じである。口角の部分は、ほんの少し上に伸びている。
歯はいずれも四本である。「禹」は『説文解字』十四下では「蟲也」
と蟲(むし)の形である。日本語の虫歯と近いだろう。虫(き)は「し」
で蛇の形とほぼ同じである。頭部は口の形の上部に入り込んでい
る。白川は「禹」について、「虫十九。九は竜の形。雌雄の竜を組み合
わせた形で、洪水神の禹を示す。」「説文」十四下に「蟲なり」とする⁽⁶⁷⁾
と述べ、「禹」自体は龍と解釈している。

舌

「舌」⁽⁶⁸⁾について『字通』は、

【舌】

「字音」ゼツ 「字訓」した・ことば

説文 ㄐ ㄒ

甲骨 𠂔 𠂕

口中より舌が出ている形。ト文の字形は舌端が分かれている。「説

文」三上に「口に在りて言ひ、味を別つ所以(ゆゑん)の者なり」
(段注本)とし、また「干口に從ふ。干は亦聲なり」とするが、
形も声も異なる。「段注」に「言は口を犯して之れを出だし、食
は口を犯して之れに入る」と干犯の義を説くが、拘泥の説である。
『六書略』に「吐舌の形に象る」とするのがよい。ト文の聞・歛
には、口舌の形をそえている。

と述べる。

「舌」に関しては諸説紛々で許慎・王国維⁽⁶⁹⁾・余水梁⁽⁷¹⁾・林義光⁽⁷²⁾・呉
其昌⁽⁷³⁾・馬叙倫⁽⁷⁴⁾・楊樹達⁽⁷⁵⁾・于省吾⁽⁷⁶⁾・徐仲舒⁽⁷⁷⁾にそれぞれ説がある。舌
の上部は「干」であり、これは「犯す」と読めるので、それに絡めて
のものが多い。しかし、白川静はそれを「拘泥の説」としてしりぞけ
ている。徐仲舒は木鐸の鐸舌という。白川静は鄭樵『六書略』卷三二
の「吐舌の形に象る」⁽⁷⁸⁾を妥当だとしているが、「舌端が分かれ」る理
由については説明していない。なお舌を下に出せば舌の表側がみえる
が、上に向けて出せば舌の裏側がみえる。この形と文字が対応してい
るのかどうかはわからない。また仮に対応していたとしても実際の舌
がこのようにみえるとは思えない。疑問は残ったままである。

甘

「甘」は、それ自体、部首であるが、その形は口の中に何か含んで
いるようにみえる。『字通』は以下のように説明する。

【甘】

【字音】カン 【字訓】かぎ・あまい

説文 𠂔

「象形」左右の上部に横に鍵を通す錠の形で、甘・鉗の初文。中にもものを嵌入する意がある。甘声の字はおおむねその声義を承ける。「説文」五上に「美なり。口の一を含むに従ふ。一は道なり」と甘美の意とするが、それは昔・酣の義をとったものであろう。甘捌の字は境がその本字。甘はもと鉗の初文で、首かせに施錠する意の字である。

【訓義】

- 一、かぎ、くびかせ、くびかせのかぎ、はさむ。
- 二、境と通じ、あまい、うまい。
- 三、あましとする、あまんずる。
- 四、よく熟する、熟して甘味がある。
- 五、玉と通じ、たのしむ。

である。

このうち、「字訓」の「かぎ」、「訓義」の「かぎ、くびかせ、くびかせのかぎ、はさむ」は白川独自の解釈である。こう読む理由は、「象形」に「左右の上部に横に鍵を通す錠の形で、甘・鉗の初文。中にもものを嵌入する意がある」と説明される。

白川は、『説文解字』の字形しかあげないが、じつは、甲骨文に多

数の例があり、『甲骨文編』には十九例引かれ、『続甲骨文編』では、さらに三例、追加している。

甲骨の中から二例あげる。



①甲骨文合集一〇九三六、殷

于甘飴

按：从口含一、「一」指口中所食。



②甲骨文合集二七一四、殷

「癸」亥卜、「貞」……祖丁其……甘饗。

他の例も、白川のいう、「左右の上部に横に鍵を通す錠の形」ではない。西周金文にはなく、戦国晩期の金文に右側だけ、ほんの少し横に出る例がある。包山楚簡・郭店楚墓竹簡老子甲編・上海博物館藏戦国楚竹書孔子詩論・秦陶文・馬王堆漢墓帛書老子甲本・同戦国縦横家書にはない。『先秦貨幣文編』では、十八例のうち、七例が「左右の上部に横に鍵を通す錠の形」となる。漢印の中に左右の上部に横に出る例があるが、出ないものが多い。そのあと、後漢の隸書あたりから、左右の上部に横に出るようになり、楷書の字形につながっていく。用例を見るかぎり、確実に「左右の上部に横に鍵を通す錠の形」となるのは後漢以降の字形である。

- ①の例に対して、「口に从いて一を含む、「一」は口中の食する所を指す」というのは、「口耳の口」の、「食べる口」ということであろう。
 ②の用例の「甘饗」も「食べる口」と関連しそうである。

欠

人体の上に身体の一部の器官が、くつついて、その機能を強調するような文字構成のものがある。

『字通』は「欠」⁽⁹⁾について以下のように記す。

【欠】

【字音】ケン 【字訓】あくび

説文

甲骨

「象形」人が口を開いて立つ形。口気を発し、ことばをいい、歌い叫ぶときの形で、そのような行為を示す字に用いる。「説文」八下に「口を張りて气悟（もと）るなり。气、儿（じん）（人）上より出づるの形に等る」とするが、口を開いて欠伸（けんしん）する意で、あくびをいう。粵（えつ）俗には今も欠欸（けんきよ）という語があつて、それはあくび・くさめをいう。

【訓義】

一、あくび、くさめ。

以下、『新甲骨文編』⁽⁹⁾が「欠」としたものをあげてみよう。

①『甲骨文合集』九一四反 賓組 ②同一八〇〇七 賓組



③同一八〇〇八 賓組



④同 七三三五 賓組



⑤同一二四七五反 子組



⑥屯九四二 何組



いずれも、側身形の身体の上に「口」が横向きについている。ただし、この「口」は人の横顔の「口」ではなさそうである。「口」自体は正面形であろう。目を側身形の人にくわえた「見（見）」の目は、「目」を一つしか描かないが、これも横顔の「目」ではないだろう。ただし「聞（聞）」の「耳」の場合は正面形というよりも、側面からみたところのようにみえる。いずれも、その「口」「目」「耳」という機能をあらわすものを側身形の身体の上に加えているといえる。その場合、身体が側身形であることは、とくに影響しないように思われる。つまり、身体が側身形であるからといって、必ずしも、目、耳、口を

横から見た所に合わせているのではなく、その形状がはっきりと認識できる角度からのものを使用しているように思われる。つまり、「目」と「口」は正面から見たものであろう。「耳」については正面からみても形は認識できるが、側面から見たものの方がよりはっきりと形状がわかる。興味ぶかいのは白川が「聞」としてあげる「a^ㄨ b^ㄨ」である。白川は「卜文の聞字に、口のあたりに手を近づけている形のものがあり、これは「以聞（いぶん）（天子に奏上すること）」をいう形であろう」と述べる。ここにあげた甲骨文はいずれも「耳」と「口」があわさった形であり、aは、ほとんど「耳」に隠れるものの、「口」の開口部のみ、わずかに見える。bは「口」と「耳」が重なる。a bともに「耳」は右耳の形に見えるが、いずれも左向きの側身形についている。ただし、「口」の開口部は、側身形の身体の向きにあっている。bは「手」の左右に「点」が二つ分かれて記される。これは「口」から出るものであろう。白川の解釈によれば「奏上」となり、それだと「言葉」ということになる。口を手で覆うのは、口を扇で覆うことにつながり、後世、礼儀の範疇で理解されると思われるが、本来は、「氣」「唾」などが相手に直接、あたらないようにする禁忌ではないだろうか。それは「氣」や「唾」が魂的なものを含んでいるからであらう。「言葉」であっても同様考えられたのかもしれない。

⑥は側身形で立つ。それ以外は跪坐している。右向きのものが三、左向きの三である。⑥は口の中に何かみえる。あくび、あるいは、くさめの時の「氣」ではないか。②④は口が少しすぼまってみえる。①②③④⑤は、本来、口の内側にあたる横画と側身形の身体の線が一画

で描かれているようにみえる。早く描くための画数の省略化である。甲骨文にも早書きの草書の端緒がみえるということであらう。

「欠」は「人が口を開いて立つ形」とされている。「口耳の口」である。側身形であって口の開口部が左あるいは右側になっている。そのため容器の「口」であれば、こぼれてしまうのである。「欠（けん）」は文字の訓義としては「あくび、くさめ」だが、それにくわえて、「口氣を発し、ことばをいい、歌い叫ぶときの形で、そのような行為を示す字に用いる」としており、「ことば」や「歌」をも含めての説明となっている。「歌」にも「欠」が含まれている。

「欠」が「口耳の口」を示す文字であるため、「欠」を構成要素にもつ文字も、「口耳の口」の意味もつ。以下、それらの文字を簡単に紹介する。

无

『字通』の「无^ㄨ」である。

【无】

【字音】キ 【字訓】むせぶ

説文



甲骨



「象形」人が後ろ向きになって口を開く形。欠（けん）の反文で

ある。「説文」八下に「飲食の気、並（ぎやく）にして息するを得ざるを无と曰ふ」とあり、食し終えることを既という。既は食（食）を前にして頭をそむける形で、十分に食し既る意。慨・慨はみな既に従い、そのような反顧の姿勢をいう。

【訓義】

- 一、むせぶ、いきづまる。
- 二、つきる。

以下、『新甲骨文編』が「无」としたものをあげてみよう。

- ①『甲骨文合集』一三五八七 賓組 ②同一八〇〇六 賓組



- ③同三〇二八六 無名組



- ④同二一四七六 子組



いずれも、口の開口部は、身体の向きと反対側に向いている。いずれも跪坐している。さきほどの「欠」から「口」の向きのみがかわったということになる。

なお、白川静のあげる甲骨文は「无」ではなく、「欠」の右向きのものであるようにみえる。さきに「欠」の例としてあげた『甲骨文合集』一八〇〇七 賓組の文字と同じにみえる。『説文解字』自体の篆書形

も同様に「欠」の右向きのものである。古文の形はそのままでもよいと思われる。

次

『字通』の「次」⁽⁸⁶⁾である。

【字音】ジ 【字訓】なげく・つぐ・つき・やどる

説文

甲骨

金文

【象形】人が咨嗟（しさ）してなげく形。口気のもれている姿である。「説文」八下に「前（すす）まず。畔（くは）しからざるなり」とし、二（に）声とするが、二に従う字ではなく、「説文」の訓義の意も知られない。次は咨（なげ）き訴えるその口気を示す形。咨は祈るとき、その口気を祝詞の「卬（さい）」に加える形。神に憂え咨（なげ）いて訴え、神意に諮（はか）ることをいい、咨は諮の初文。そのたち嘆くさまを姿という。第二・次第の意は、おそらくくりかえすことから、また「次（やど）る」は軍行のときに用いるもので、古くは「陳（し）」の字義にあたり、音を以て通用するものであろう。古文の字形は、他に徴すべきものがない。

く、中島竦の「書契淵源」に、婦人の首飾りを「儀礼、士冠礼」に次と称しており、その象形の字であろうという。「説文」の解は、「易、夬、九四」「其の行、次且（じしよ）」の語によって解したものであろうが、次且は二字連語、そこから次の字義を導くことはできない。

【訓義】

- 一、なげく、たちなげく。
- 二、なげきうったえる、なげきはかる。のち吝・諂を用いる。
- 三、かさねつづける、つぐ、つき、つきつきに。
- 四、ならぶ、順序にしたがう、ついで、序列、そのならぶところ。
- 五、疎（し）と通用し、やどる、軍がやどる。疎は軍の駐屯地に標木を立てた形。陣屋、かりにやどる。
- 六、旅のやどり、やど、たび、そのとき、あいだ。
- 七、そのほとり、かたわら。

『漢字文物大系』は甲骨文の形をあげていない。金文からあげる。白川は、「人が吝嗟（しき）してなげく形。口気のもれている姿である。…次は吝（なげ）き訴えるその口気を示す形。吝は祈るとき、その口気を祝詞の「口（さい）」に加える形。神に憂え吝（なげ）いて訴え、神意に諂（はか）ることをいい、吝は諂の初文。そのたち嘆くさまを姿という」と述べる。

ここも、口耳の口と「口（さい）」の組み合わせである。白川は「口気」と述べる。「口（さい）」に対して何らかの働きかけが必要であり、

その一つが口気を吹きかけることではないだろうか。また「口気」は物質的な気ではないだろう。そこには魂的なものが含まれているように思われる。

つまり、「口（さい）」は単独では意味をなしがたいということであろう。「口（さい）」に対して魂的なもので働きかける必要がある。『字統』・『字通』は単独文字としての「口（さい）」は収録していない。その理由の一つとして上記のように解釈することは可能かもしれない。

次

『字通』の「次」⁽⁸⁷⁾である。

【次】【涎】

【字音】セン・エン 【字訓】よだれ・うらやむ

説文



【会意】水十欠（けん）。欠は人が口を開く形。「説文」八下に「慕欲（ぼよく）の口液なり」とあり、品の初文。重文に両水に従う形の字があり、金文の盜（盗）の字はその形に従う。

【訓義】

- 一 よだれ。
- 二 うらやむ、ほしがる。
- 三 流れるさま、つらなるさま。

『字通』は『説文』の例しか示さないが、『新甲骨文編』には二一の例が記されている。ここでは『中国漢字文物大系』の中から二例を提示したい。

①『甲骨文合集』一九九四五 殷 ②同八三一七 殷



…車翌父乙次



…洹不次

「欠」の上部の横向きの口から、液体のようなものがでてきている形である。『中国漢字文物大系』では「本義、羨慕する所有りて津液を生ずるを指す。字、甲骨文に見ゆ。或いは口液外に流るるを象り、或いは口液滋(いよい)よ口内に生ずるを象る…」⁽⁸⁸⁾とある。『新甲骨文編』にあげられる字形は、側身形で立つもの、跪坐するもの、舌を出すもの、手がつくもの等がある。中から外に噴射していることをあらわすため、口の入り口は外向きに広がっているものも多い。

盗

『字通』の「盜」⁽⁸⁹⁾である。

【盜】(盜)

【字音】トウ(タウ) 【字訓】ぬすむ・とる

説文 盜

金文



【会意】旧字は盜に作り、次(ぜん) + 皿(べい)。皿はおそらくもと血に作り、血盟の盤。それに次(唾)してこれをけがし、無効とする行為をいう。血盟に離叛し、共同体の盟約から逸脱するもので、「左伝」において盗とよばれている者は、みな亡命者であった。…

『字通』は金文と『説文』の例しか示さないが、『新甲骨文編』には一例記されている。ここでは『中国漢字文物大系』⁽⁹⁰⁾にあげられるものを示す。

①『甲骨文合集』八三一五 殷

丙寅卜、洹其盜



「次」より派生してきた文字であろう。「口」の形は外向きに広がっている。白川は、盤に「唾」することだという。「唾」は呪術的な意味で使用されることが多い。馬王堆漢墓出土の『五十二病方』にも唾を使用した呪術が記される。拙著でも「唾や洩(はなみず)などの体液は、なにがしか魂の一部分を含むと考えられていたのだろう」と⁽⁹²⁾魂の観点から考察したことがある。

吹

『字通』の「吹」⁽⁹³⁾である。

【吹】

【字音】スイ 【字訓】ふく

説文 𠵼

甲骨 𠵼

金文

𠵼 𠵼

【会意】口十欠(けん)。「説文」口部二上に「嘘(うそぶ)くなり」、また欠部八下に「気を出だすなり」とあって、重出。卜文には口を開いて息を吹く人の側身形に作り、象形。金文はその形にまた「(さい)を加えており、𠵼(さい)は祝禱や盟盟を収める器の象。これを吹くのは、その呪能を妨げるための呪的な行為と考えられる。欠部の字には、歎・歎・歌・歌・歌・歌(欧)など、古代の呪儀に関する字が多い。

【訓義】

- 一、ふく、ふきかける、息をふきかける。
- 二、風がふく、ふき動かす、かぜ。
- 三、楽器をふく、ふきならず、吹奏の器。

白川は、このあと、「詩、小雅、何人斯」に「伯氏壘(くん)を吹き仲氏篋(ち)を吹く」の下句に「此の三物を出だして 以て爾(なんぢ)を詛(のろ)ふ」とあり、ものを吹くことは、呪詛的な意味をもつことがあった⁽⁹⁵⁾と述べている。白川のこの部分の訳は「このお供えもので そなたを詛(のろ)ってやる」⁽⁹⁶⁾である。なお小林一郎は「詛(ちか)はん」⁽⁹⁷⁾と訳しており、「のろう」ではない。

「息」は呼吸と関連する。息によって魂を吹き込むことができる⁽⁹⁸⁾とされる例は多くある⁽⁹⁹⁾。ここでは中国の少数民族の事例をあげよう。土をこねて作った人形に対し、「…人間の姿形はできましたが、血も通わねば、呼吸することもできません。大神は人間の体に、「フー」と息を吹きかけました。とたんに、体に血が流れ、呼吸をはじめました」⁽¹⁰⁰⁾がある。日本の例で、なおかつ、息を吹き込まない楽器だが、「弾琴は時代によって意味が違いがあり、もとはたまふり(魂振り)や神の言葉を聞く託宣の手段だった」⁽¹⁰¹⁾とみえる。楽器は「魂振り」と密接に関わり、神の託宣とも関連があるとされている。その楽器について白川は「詛(のろ)ふ」ことも関わるとし、そのために楽器を吹くという。

- ①『甲骨文集』九三五九殷。「吹入」⁽¹⁰²⁾。
- ②同二〇三〇一自組



③同八一八〇一 賓組



④同九三五九 自賓間



⑤同九三六二 自賓間



⑥英二三六四 正歴組



⑥英二六七四 正歴組



「吹」は、「𠂔(さい)」を吹いているようすである。右向きあるいは左向きの側身形で跪坐した姿の上についている「口」は口耳の口であり、それに向かい合う「口」は「𠂔(さい)」なのであろう。②は口耳の口は下向きにあらわされ、それに向き合う形で「𠂔(さい)」がえがかれる。⑤の「𠂔(さい)」は上向きである。『殷周金文集成』二二七九、五四二八も「𠂔(さい)」は上を向いている。
口耳の口と「𠂔(さい)」が向き合うものは、「吹」の文字通り、容器に息を吹き込む形にみえる。⑤および⑥は口耳の口から何か出てい

るようすがあらわされている。「次」や「盜」に似ている。それが「唾」なのか、「氣」なのか、あるいは「声」なのかは、よくわからないが、それを「𠂔(さい)」に吹き入れているようにみえる。

飲

『字通』の飲^⑧である。

【飲】(飲)「𠂔」「飲」

【字音】イン・オン 【字訓】のむ・みずかう

説文 𠂔 𠂔 𠂔

甲骨 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔

金文 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔

ここでは字形のみあげる。白川が、甲骨文としてあげる字形には、「欠」のないものもあげられている。「𠂔」は「𠂔(酒甕)」の上部に「今(A||口)」がつく形である。「𠂔」は下向きで「𠂔」に向かって開いている。それにさらに「欠」がついて「飲」になる。そのため、この文字は「口」が重複していることになる。
『甲骨文合集』七七五正、殷

王其飲⁽¹⁰⁾



この文字では、口から舌が出ており、酒甕のような容器から、酒あるいは水などの液体を飲もうとしている様子であろう。口からは、気などを出す場合と、水などを取り入れようとする場合にわかれる。「欠」は出入の両義をもつが、「飲」は「入」と関わる。

「欠」を構成要素とする甲骨文

意味が確定されていないものにも「欠」を構成要素とする文字がある。甲骨文は存在するが、そのあと使用されなくなる。それが会意文字であったならば、その意味について推測することはできる。

伎の「支」は、手に枝をもち、ものを撃つ形である。

①『甲骨文合集』一八〇〇九 賓組⁽¹⁰⁾



②同三〇七七九 何組⁽¹⁰⁾



『字通』支は、

【支】

【字音】ボク 【字訓】うつ

説文 支

甲骨 支

【会意】ト（ぼく）十又（ゆう）。トは木の枝の形。これでものを撃つことをいう。「説文」三下に「小（すこ）しく撃つなり」とし、ト（ぼく）声とするが、ト文の字形は、小さな枝をもつ形である。支の声は、ものをうつときの音である。

【訓義】

- 一、うつ、かるくうつ。
- 二、むちうつ。

とする。

そして「部首」のところに、「：改・讓・赦・敗・敲は、それぞれ呪的な行為の意味で毆撃する形の字。敲はまた敲に作り、支・又・支（しゆ）の間に互いに出入する関係のものがある」という。

獻

同三二七五七 歴組⁽¹⁰⁾



「虜」に関して、
『字通』⁽¹⁰⁾ 獻は、

〔訓義〕

一、牲犬で清めた獻器、神にそなえささげるものを入れる。たてまつる、ささげる、すすめる。

とする。

「虜」自体は「こしき」である。犠牲の「犬」で「虜」を清めるという。獻は、「犬」のかわりに「欠」が入っている。「欠」は先に考察したように「息」という「氣」を吹きかける、あるいは「唾」を吹きかけるなど、口から「氣」あるいは「液体」などを出している様子である。「犬」で清めるならば、「欠」もまた何らかの呪術的行為を行っているともみなしうらだろう。

炳

同一八〇一五 賓組⁽¹¹⁾。



ここは「𠂔」と「欠」が合わさった文字である。楷書の「獻」に隸定できるかもしれない。「獻」であれば、梁、顧野王『重修玉篇』は婉、宋司馬光『類篇』は婉、弱など、とみえる。

しかし、ここでは「𠂔」に対して息を吹きかけているようにみえる。「𠂔」については、「𠂔」という文字があり、それは「骨」である。上述したようにその解釈は人骨と獸骨に分かれる。しかし、いずれにしても、そこに靈魂が憑りつくことによって宗教的な意味が生じるという確たる認識がある。換言すれば、文字以前に靈魂が憑りつくという認識がなければ、そのような文字は作られるはずもないということである⁽¹²⁾と考察したことがある。

「炳」の「𠂔」に対して息を吹きかけるような行為は実際に行われなくなったのであろう。

欠

同一四一五七 賓組⁽¹²⁾。



人の後ろから、息を吹きかけているような形である。落合は「会意？／形声（亦声）。人と口を開けた人の形である欠（けん）に従う。甲骨文字では恩恵を降す意味で使われているが、具体的な内容は記されておらず、字形が意味するところは不明。…①帝が恩恵をくだすこと。庚戌卜貞、侑、庶秋、惟帝令依⁽¹³⁾」とする。ここでは呪説ではなく、恩恵と解釈されている。

「欠」を構成要素とする文字

「欠」を構成要素とする文字は右にあげたもの以外に、「欲」（詛楚文にあり）・「歌」・「歐」が「𠂔（さい）」と組み合わせられている。たんなる形声文字であれば、音だけを借りているということになるが、会意文字的な形声ととれば、「口」と「𠂔（さい）」の二つの意味の組み合わせということになる。いずれも甲骨文にはない文字であり、今回の考察からは外したが、興味ぶかい組み合わせである。

おわりに

「口耳の口」と白川のいう「𠂔（さい）」は見たところ区別がつかない。落合も「甲骨文字の段階ではほぼ同化しており、字形から両者を識別することは困難⁽¹⁴⁾」と述べる。そこで確実に「口耳の口」だとわかるものをまず抽出してみた。青銅器の面にみえる「目」は甲骨文の「目」に似る。それならばそこにみえる「口」も「甲骨文」の口に近いだらうと考え、その「口」の形について考察した。「齒」があるものが多い。口を閉じる形は少なく、あけているものが多い。「口」

はあけることによって、「言」い、「食」べ、さらには気を吹きかけ、唾を飛ばすという、はたらきかけができるのである。

甲骨文で確実に「口」の形とわかるものは「齒」と「齧」である。口をあけて「齒」があらわされる。「齧」については歯を蝕（むしば）む「虫」の形があらわされている。この形の口は扁平ではないことが多く、四角く開かれている。

甲骨文に「口を疾む」という文脈から「口耳の口」と判断できるものがある。「齒を疾む」という文と対応させると、この場合の口も歯疾なのかもしれない。歯疾の原因を祖霊とする例があり、ここもそうかもしれない。この文字の形はかなり扁平であり、口角は上がっている。

青銅器にみえる「口」は扁平ではなく、また口角がそれほど上がっていないものもある。「𠂔（さい）」が単独であらわされる例はないようなので、「口耳の口」とみた。

以上、形の上からでは明確に判断することは難しい。そのため、文字の構成要素として「口」が使用されている時に、それが「口耳の口」なのか「𠂔（さい）」なのかを形状から判断することは難しいかもしれない。

側身形の身体の上につく横向きの「口」は「口耳の口」とされている。「口」の形自体は、正面からみたものであるように思われる。機能としての「口」は正面形の方がわかりやすい。それをさらに横向きにし、その方向から何かが出るようなイメージをもたせている。これは「欠」にあたり、「あくび」とされているが、「口」から出る「気」

白川は「呪」⁽²⁾という語を多用する。「もと祝に作る。祝に祝頌と呪詛の両義があり、のち呪詛の字に祝を用いる」⁽¹⁷⁾とされる。

「呪」とは何なのだろう。かつて文字以前の絵について、「そもそも絵を描いたり、何かを作ったりするのは、それが実現するようにという、予祝の意味をもつことが多い。狩りの獲物があるようにと洞窟に狩猟図を描くというのが、古代において絵を描く根本的な意味なのだろう。つまり呪術である。その際、狩りが成功するようにと言祝していたのだろう。「文字」が生まれる以前から「絵」や「造形」によって、それらのことが連続と行われていた」⁽²⁰⁾と述べたことがある。

はじめに言葉があった。そのあと絵を描き、その一部が記号化して文字へと発展していく。言祝ぐことは予祝の意味をもち、呪詛もまた言葉に出したことが必ず実現するという観念のもとに「口」から発せられる。絵を描き、文字を記すことは、その延長線上にあるだろう。

「口」から「息」を吹き、「唾」を吐き、「言葉」を発することは、みな「魂」と関わり、その存在を当然の前提とする原始的な宗教観の中で行われている。文字の一部はそのような観念を背景として生まれたいと思われる。

「口」(さい)が神と人(の魂)をつなぐ装置であるとすれば、「口耳の口」は内なる魂を発現させる出口であろう。

注

(1) 平凡社、一九八四年、二八四頁。新訂『字統』(二〇〇七年)では、「古・可・召・名・各・客・吾・吉・舎・告・害・史・兄・祝・啓・品・区(區)・臨・敵(敵)などは、みな祝禱の器を含む形。また曰に従うとされる者・習・曹・智・曆・魯など」と傍線の二三文字が追加されている。

(2) 白川静は、『字統』二三頁の凡例、「文字資料について」で、以下のよう

に記す。

古代文字の資料として、甲骨文(卜文)・金文・石鼓文、及び『説文解字』

に収める篆文・籀文・古文の字形を取めた。その採集書は次の諸書である。

『甲骨文編』十四卷 孫海波 民国二十三年「一九三五年」

『甲骨文編』十四卷 中国科学院考古研究所編輯 一九六五年

『統甲骨文編』十四卷 金祥恒 民国四十八年「一九六〇年」

『金文編』十四卷 容庚 重訂本「初版は一九二五年」

『古文字類編』高明 一九八〇年

『漢語古文字字形表』徐仲舒 一九八〇年

『説文解字』に収める字形は『説文篆韻譜』南唐 徐鍇所収のものによった。

説文新附の字など、『篆韻譜』未収のものは、大徐本・孫星衍校本によつて補った。

右の文字資料のうち、『説文解字』に収める字形は、無印のまま文字資料欄の冒頭に掲げ、ついで甲骨文には・印、金文には◎印、それ以外の文字には○印を付して、この順にかかげた。(※書籍に関しては『』になおし、振り仮名は省略した。また「一九三五年」のように西暦をおぎな

た。

これを見ると、おおよそ一九二五〜一九八〇年の資料を使用していることがわかる。「字統」の初版が一九八四年であるから、当時の資料をほぼ網羅していたことになる。ただ、島邦男『殷墟卜辞綜類』大安、一九六七年は使用されていない。また郭沫若主編『殷墟甲骨文字研究』中華書局一九七七〜一九八二年、中国社会科学院歴史研究所編『甲骨文合集』中華書局一九七七〜一九八二年、中国社会科学院考古研究所編『殷周金文集成』中華書局一九八四年、八〜一九九四、一二は出版時期を考えると使用できなかったということになる。そうならば白川静『字統』の字形説に対して、『甲骨文合集』や『殷周金文集成』などに新しく紹介された字形にもとづいて、説をたてることも可能かもしれない。

(3) 「口耳」は、『荀子』勸学「小人之學也、入乎耳、出乎口。口耳之間、則四寸耳」にみえる。拙稿のタイトルにも「口耳」を用いた。

(4) 白川静著、平凡社、一九九六年、四八五頁。

(5) 白川静著「甲骨金文字論叢」初集二集三集四集五集六集七集八集九集一〇集一九五五〜一九六二年、のちに『甲骨金文字論集』朋友書店一九七三年、三〇七〜三六四頁に「載字説—古代の盟祝禱儀礼と文字—」としてみえる。ただ林泰輔(一八五四〜一九二二年)の「清国河南省湯陰県発見の亀甲獣骨について」(『史学雑誌』一九〇九年、第二〇巻八・九・一〇号。のち『支那上代之研究』進光社、一九二七年初版)の第二回に、「口」に从ふ字は二十字以上あり(一三五頁)、「貝を口とし、冊を口とせしは、その下にある口は横の形に象りたるものなるべけれど(二三六頁)は白川静の説のさきがけとみなしてよい。「横」は、ほこ、ひつの意味である。末次信行「口」(『白川静を読むときの辞典』立命館東洋文字文化研究所叢書第五、平凡社、二〇一三年、七七頁)は、「甲骨文の口」の形は、口形を呈しており、後漢時代の字書である『説文解字』にも共通する形であるところから、口耳の口の意味とされ、口を含む一群の文字系列としてみられる。「口、器皿、窓、坎、無意味な飾り、物体」の六つの意味を掲げる辞書もある。これに対して白川は、「口」は金文には器の形で祝詞(のりと)などを入れるものであり、甲骨・金文にはこれを含む字形が百数十字あり、これらは載書(さいしょ)関係の字として一列をなすとす。つまり、甲骨文・金文の「口」の意味の時代と『説文解字』の口の意味の時代との間のある時期に一線を引き、この前と後とが、文字の意味が連続せず、断絶があったと示唆しているのである。

また、白川は、そのいわゆる系列字は意味的な連関をもち、「口」に従う載書関係の字として一列をなし、それから分化した「日」「言」「音」「意」を含む文字群も一列をなすとす(文字系列)。「口」は祝告(神に告げる)や呪詛(のろ)や盟誓(神にちかう)に関連する意味をもつ。たとえ「口」は「口」中に祝詞の入っている形であり、「言」は、「口」と辛からなる会意字で、「口」は誓いを意味し、辛は身体に入れ墨をすときの針のことで、「言」は神への誓いが破られた場合、罰をうけるという自己詛盟(じこそめい)の言葉となるというように、意味の連関が同系列字にはみられたとする。このような文字体系は、その時代の意識体系と対応するとし、したがって、「口」字系の想定は、白川文字学のオリジナルであるとともに、殷代社会に関する白川説を生み出す機軸といえる」と述べている。ほかに白川静著、金子都美絵編・画「サイイのもの」がたり「白川静の絵本」平凡社、二〇一六年は、「サイ」について、絵をつけて、わかりやすく解説している。

(6) 白川静『漢字百話』(中公新書 中央公論社、一九七八年)一四七頁では、「甲骨文・金文の文字には、「口」形を含む文字で口耳の口と解しうるものは全くなく」とあり、「全くなく」から「ほとんどなく」に修正されている。

- (7) 偽古文は除いた。
- (8) 其發有逸口。逸口は、伝に「過口」、蔡伝に「過言也」。
- (9) 度乃口。
- (10) 否則厥口詛祝。
- (11) 無以利口亂厥官。
- (12) 利口惟賢。
- (13) 子口卒瘞。
- (14) 中国古典文学大系一五『詩経・楚辭』、平凡社、一九六九年、一一四頁。
- (15) 好言自口、莠言自口。
- (16) 経書大講七卷、小林一郎、詩経中、一四九頁、一九三八、平凡社。
- (17) 前掲『詩経・楚辭』一五三頁。
- (18) 讒口置蠶。
- (19) 前掲『詩経・楚辭』一五七頁。
- (20) 蛇蛇頌言、出自口矣。
- (21) 前掲『詩経・楚辭』一六六頁。
- (22) 以就口食。
- (23) 前掲『詩経・楚辭』二二三頁。
- (24) 落合淳忠「甲骨文字の字種整理」(『立命館文学』六三三、二〇九〜二二一頁、二〇一三年)を参照。
- (25) 彭邦炯、語文出版社、一九九九年。
- (26) 総主編、金維諾『中国美術全集』青銅器I、時代出版伝媒股份有限公司、黄山書社、二〇一〇年、二七三頁。現蔵上海博物館。
- (27) 弓身扁平：両側均飾獸面紋和人面獸紋。
- (28) 前掲『中国美術全集』二七五頁。現蔵德国科隆(ケルン) 東亞芸術博物館 (Museum of East Asian Art)。
- (29) 鉞身飾鏤空人面紋。
- (30) 白川静『字通』平凡社、一九九六年、一五二〇頁、目、甲骨文。おそろく、一期 鉄一六、一のもの。
- (31) 前掲『中国美術全集』二五六頁。
- (32) 眉、目、鼻、耳、口皆突起：嘴角両側各有一個在亞字形框中的族名文字「醜」。銘文右為正書、左為反書。現蔵中国 国家博物館。
- (33) 前掲『字通』九三八頁、舌。
- (34) 『中国美術全集』青銅器四より。切り取り。
- (35) 鉞身有透空的凹目露齒神面。眉、目、鼻皆突起、口稍凹下。現蔵中国 国家博物館。
- (36) 玉にも人面のあるものがある。口は閉じられていることが多い。

- (37) 前掲『甲骨文集』第四集一六四頁。
- (38) 陳年福撰『殷墟甲骨文摹積全編』：國家『十一五』規劃重點圖書・線裝書局、二〇一〇年、第二卷、一〇八四頁は「貞尸口御于七甲」と積す。
- (39) 徐中舒主編『甲骨文字典』四川辭書出版社、一九八八年、八七頁、口。
- (40) 前掲『甲骨文字典』八三八頁、尸。
- (41) 中国社会科学院考古研究所編『殷周金文集成積文』第四卷、香港中文大學中國文化研究所、二〇〇一年、一七八頁、五四五二、口尊。および張桂光主編、陳曦・秦曉華副主編『商周金文辭類纂』中華書局、二〇一四年、二〇八「口」。
- (42) 同右、第五卷、二四八頁、八八〇一、上海博物館藏。
- (43) 同右、第五卷、二〇二頁、八五三〇。
- (44) 彭邦炯、語文出版社、一九九九年。
- (45) 前掲『商周金文辭類纂』一三〇八「口」。前掲『殷周金文集成』第二卷、二八〇頁、二五九四では、「戊寅王曰黜隲馬彰賜貝用乍父丁尊亞受」と隸定されている。
- (46) 孫海波撰集、商承祚校訂、哈爾燕京社、一九三四年。
- (47) 四川辭書出版社、一九八八年。
- (48) 上卷、雄山閣出版、一九九五年。
- (49) 朋友書店、二〇一六年、一〇五頁。
- (50) 落合には『漢字の成り立ち』説文解字から最先端の研究まで(筑摩選書、二〇一四年)があり、「字音からの字源研究」において加藤常賢・藤堂明保をとりあげ、「字形からの字源研究」において白川静をとりあげている。
- (51) 落合氏に直接、うかがった。
- (52) 説文『口人所以言食也。象形。凡口之属、契文作、正象口形。甲編一二一五作、尤肖。類纂類編文編文字編均失録(李孝定編述『甲骨文字集釈』、中央研究院歷史語言研究所、一九八二年、三四三頁)。
- (53) 漢戴德撰『大戴禮記』卷六、武王踐阼第五十九に、「机の銘に曰く、皇皇として惟だ口、昵(はじ)を生ずるを敬(つつ)しむ(口)口、言口能害口也机者人君出令所依故以言語為戒也」とあり、注に「昵は恥なり。言為君子榮辱之主、慎しまざる可きか(昵恥也。言為君子榮辱之主、可不慎乎)とみえる。また「口口」の注に、「言口能害口也。机者人君出令所依、故以言語為戒也」とある。
- (54) 卜辞「亡作口」(見庫方七〇三「亡至口」(屯乙八七〇四、十八、八二〇、…)俱興口舌之禍。大禹謨云、「唯「惟」口出好興戎」。大戴禮武王踐阼機「机」之銘曰、「口生昵、口口口。『說苑』敬慎篇言、『孔子之周、觀於太廟右陛之前有』金人焉。三緘其口〔而銘其背曰、『古之慎言人也。戒之哉、
- 戒之哉。無多言、多言多敗：』」。戒以口生禍。故易頤卦以慎言…。※文意が通じないため、引用の原文を確認し、「」の部分をつ補った。『殷代貞卜人物通考』香港大學出版社、一九五九年、七〇〇頁。
- (55) 前掲『字通』四八五頁。
- (56) 同右。
- (57) 前掲『字通』一五九三頁。
- (58) 饒宗頤説參小字条下。「按…甲骨文口字象口形、卜辞有「疾口」之占、此乃用「口」之本義。又虞辛庚丁時貞人名「口」。至於卜辞口字之另一種用法、如乙八八九二合集二二四〇五之「多口」、「又乍余、口十」、似相當於「人口」、「丁口」之「口」。
- (59) 前掲『字通』四八六頁。
- (60) 同右、六六五頁。
- (61) 前掲『殷墟甲骨文摹積全編』六五三頁。
- (62) 甲骨学会編『中央研究院歷史語言研究所小屯殷虛文字乙編積文』大安、一九五九年、乙中五五三、五七〇、四六〇〇。なお前掲、徐仲舒『甲骨文字典』は同じところを引くが、「貞尸齒不佳父乙蚩」と「父乙」が入っている。
- (63) 同右「小屯殷虛文字乙編積文」四六二四。徐仲舒『甲骨文字典』は同じところを引くが、「貞尸齒不佳父乙蚩」とする。
- (64) 『漢字文物大系』
- (65) 『字通』五二頁。
- (66) 『字通』虫(き)に紹介する甲骨文。
- (67) 同右、五一頁。
- (68) 同右、九三八頁。
- (69) 『説文解字』三上。
- (70) 王国維『劉放遂記説文練習筆記』『国学論叢』北京清華學校研究院〔編〕商務印書館、二卷二號一九三〇年。
- (71) 余永梁『殷虛文字統考』『国学論叢』同上。
- (72) 林義光撰『文源』卷二、一九二〇年。
- (73) 吳其昌著『殷虛書契解詁』文史哲出版社、一九七一年。
- (74) 馬敘倫著『説文解字六書疏証』卷五、科學出版社、一九五七年。
- (75) 楊樹達著『卜辞求義』『楊樹達文集』上海古籍出版社、二〇〇七年。
- (76) 『釋舌』『双劍謄股契駢枝統編』『于省吾著作集』中華書局、二〇〇九年。
- (77) 前掲『甲骨文字典』卷三、舌。
- (78) 『通志』卷三二、「六書略」第二、象形第一、人物之形、第三上、舌に「象吐舌之形」とみえる。

- (79) 前掲『字通』四三〇頁。「歛」の意味で使用している部分は省略した。
- (80) 劉釗、洪颺、張新俊編纂、復旦大學出土文獻與古文字研究中心專刊、三、福建人民出版社、二〇〇九年、四九七頁。
- (81) 前掲『字通』四三一頁。
- (82) 前掲『字通』一四〇〇頁。
- (83) 同右。
- (84) 同右、九四二頁。
- (85) 同右、四九九頁。
- (86) 六七八頁。
- (87) 九四二頁。
- (88) 劉志基主編、大象出版社、二〇一三年、第八卷、五六六頁。六例あげられる。
- (89) 本義指有所羨慕而生津液。字見甲骨文、或象口液外流、或象口液滋生口内…。
- (90) 前掲、『字通』一一〇一頁。
- (91) 劉志基主編、大象出版社、二〇一三年、第八卷、五六六頁。六例あげられる。
- (92) 拙著『魂のありか』二六四頁。ほかにも「唾」について言及している。なお『三才図会』には唾壺唾孟図考がある。
- (93) 前掲『字通』八七七頁。
- (94) 『詩経』の伝によれば、「三物豕犬雞也。民不相信則盟詛之。君以豕、臣以犬、民以雞」とみえる。
- (95) 前掲『字通』八七七頁、吹、語系。
- (96) 『詩経雅頌』平凡社、一九九八年、二二一頁。
- (97) 『経書大綱』平凡社、一九三八年、二二四頁。
- (98) 拙著『魂のありか』一三四頁、「呼吸と魂」を参照。
- (99) 碓井益雄『靈魂の博物誌・原始生命觀の体系』河出書房新社、一九八二年、「人間創造と氣息」、「イキモノ」、「氣息すなわち靈魂」等。
- (100) 君島久子『中国の神話』筑摩書房、一九八三年、五二頁、トウロン族。
- (101) 埋蔵文化財センター「長岡京発見の琴形」(金子裕之、肥塚隆保) https://repository.nabunken.go.jp/dspace/bitstream/11177/3339/1/AN00181387_1995_15.pdf
- (102) 前掲『中国漢字文物大系』第八卷、五四七頁に「按、方国名」とある。
- (103) 前掲『字通』四五頁。
- (104) 前掲『中国漢字文物大系』第八卷五六二頁。
- (105) 『新甲骨文編』卷八、四九七頁。

- (106) 同右。
- (107) 前掲『字通』一四八〇頁。
- (108) 『新甲骨文編』卷八、四九七頁。
- (109) 前掲『字通』四四四頁。
- (110) 同四九八頁。
- (111) 拙稿「四」について、『漢字学研究』五号、白川静記念東洋文字文化研究所、二〇一七年、字説。
- (112) 前掲『新甲骨文編』卷八、四六七頁。
- (113) 前掲『甲骨文字辞典』一三頁、一部内容を省略した。
- (114) 同右一〇五頁。
- (115) 拙稿「二鬼」系の病因論―新出土資料を中心として―『大阪府立大学紀要』人文・社会科学四三卷、二〇〇五年を参照。
- (116) 前掲『字通』三八七頁、兄。
- (117) 前掲『殷周金文集成积文』第五卷、九五〇七、三八六頁。
- (118) 前掲『字通』四三一頁、見。
- (119) 同一五二〇頁、目。
- (120) 同一四〇〇頁、聞。
- (121) 同六七九頁、耳。
- (122) 前掲『字通』四八五頁。
- (123) 同右、六八頁。
- (124) 同右。
- (125) 同右。
- (126) 白川静、梅原猛『呪の思想…神と人との間』平凡社、二〇〇二年。
- (127) 前掲『字通』七二四頁、祝。
- (128) 拙稿「戦国楚帛画の舟よりみる復活再生觀念の考察」『人文学論集』三二、二〇一四年、二七頁。

※拙稿は平成30年度科学研究費基盤研究(C)「タマシイの観点からみた中国を中心とする東アジア辟邪文化の総合的研究」の研究成果の一部である。
 (大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科教授・立命館大学衣笠総合研究機構招聘研究教員(教授))

